

大平さんの「じふ」 思い出すままに

加藤 藤太郎

私が大平さんに初めてお目にかかったのは、たしか大平さんがまだ一橋大学の学生の時だったと思います。私
が三豊中学（現観音寺第一高等学校）と一橋を通じて、大平さんの学校の先輩に当るということで訪ねてきて下
さったのが、お目にかかる最初の機会だったと思います。その時の第一印象は、温厚・誠実そのものでした。以
来、私と大平さんのご家族ぐるみにつき合いは、去年大平さんが雄図むなく、世界中から惜しまれてご逝去な
さるまで続きましたが、この間の大平さんの温厚・誠実なお人柄は、終始一貫して変わりませんでした。大蔵省時
代から総理大臣にご就任になられた後も、どんなご多忙の時でも、正月には必ず拙宅にご挨拶にきて下さいまし
た。ご本人の都合がつかない時は、奥さまかお子さまが、必ず代理でお見え下さいました。

池田内閣発足の時、当時官房長官だった大平さんが、「寛容と忍耐」というスローガンを打ち出されましたが、
あれは決して一部のジャーナリズムが論評しているような「政策」ではなく、大平さんの政治と取り組む「心構
え」であったと思います。広く心を開いて民意を汲み取り、権力の座に坐った者の陥りがちな高慢さを極力排除
しようという自らを戒めての心構えからだったろうと思います。

若い頃の大平さんの人格形成に最も大きな影響を与えたのは、中井虎男先生ではないかと思えます。中井先生
は私と大平さんの三豊中学時代の数学の先生で、その円満具足したご人格は卒業生全員の敬慕的でした。特に
大平さんとの師弟の交りは、大平さんが政界に入られた後も密接に続き、私どもも羨ましがる間柄のようでした。

大平さんは後年、その自著『素顔の代議士』の中に、中井先生を偲んで、以下のように書いておられます。

「われわれはその人の佛をしのぶだけで心温り、生くる悦を覚えるような人との道縁に侍ることができれば、それは何物にも代え難い人生の恩寵である。又その人となりを懐うことによって常住坐臥道心に還ることができようような人の佛を心に持つことができれば、それ程の人生に対する奨励はないと言えよう。中井虎男先生は、私にとつては、正に、そういうかけ替のない人であり、導師である」

これは余り世間に知られていない話ですが、実は、大平さんがまだ大蔵省の課長の頃、郷里の香川県の知事にと出馬を懇請されたことがあり、私にも意見を求められました。私は知事にならいつでもなれるからと反対しました。それから一、二年後であつたと思いますが、こんどは代議士になりたいとお話があつたので、それはいい、大いにやりなさい、と賛成しました。いま考えてみると、知事に反対し、代議士に賛成したことは間違つていなかったと、内心つくづく喜んでおります。

しかし、それにしても大平さんは、余りにも早く、私たちを遺してこの世を去られました。日本の国政の枢機を掌握され、世界中の期待と注目を浴びながら、その激務に殉職されました。このことだけは私にとってなんとも口惜しい、痛恨の極みです。今はただひたすら大平さんのご冥福をお祈りし、遺されたご令室さまはじめご家族の皆さまが、ご健勝にてそれぞれ場でご活躍下さるよう祈念するだけです。

大平さんのご逝去後、近しかったひとびとの間から、翕然として『大平正芳回想録』を編纂しようという気運が盛りあがりました。多くの方々のご努力、ご協力によって、いまその第一巻の刊行も間近いと聞いております。

私は、大平さんの長い友人として、みなさまのごこのご努力に感謝を捧げるとともに、全三巻の立派な刊行を心から待ちわびるものです。

(神崎製紙相談役)